

# 日本語の呼称と母性原理

— 深層心理学からの考察 —

板倉元子

## はじめに

日本語の研究というラングの研究は盛んにおこなわれているが、文化を含めたパロールの研究、特に心理面からのことばの研究が少ない。本研究は、話し手の置かれている状況や話し手と聞き手との関係によって変化することばを、言語主体の心理に焦点をあてて考察するという一つの試みである。呼称を含めた待遇表現の研究は歴史も長く、その数も多い。しかし従来の研究の多くはこの心理面の研究に目を向けずにいたことは否めない事実である。ことばが文化的・心理的背景を基にして成立している以上、文化的・心理的面からの研究は必須である。本論文では日本語の呼称について文化面—つまり日本人の志向する意志という面に焦点をあてて考察する。

以下にこの論文の構成を示す。

## 第一章 日本人の自己機制

## 第二章 日本文化の底流にみる母性原理

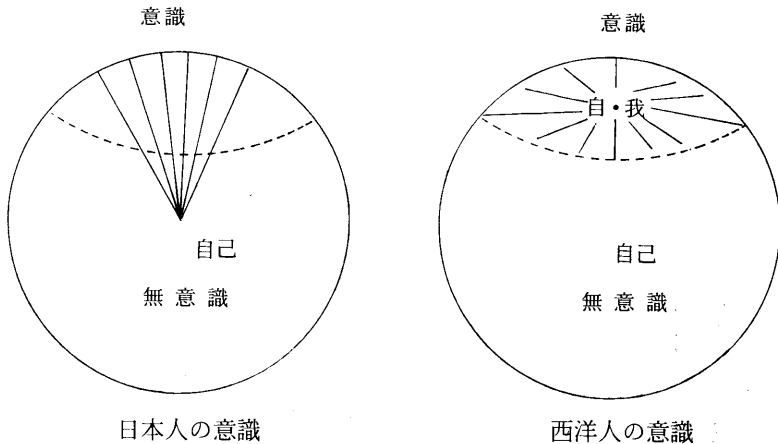
## 結 び

### 第一章 日本人の自己機制

#### 1. 日本人の意識の在り方

日本語は主語が省かれることが多く、日本語には主語がないと主張する学者もいるくらいである。「きのう（わたしが）東京へ行ったらね……」という具合に主語を省いて話は進んでいく。ほとんどの場合主語を省いても文脈から判断できるからである。このように日本語では、英語・ドイツ語・フランス語などいわゆる西洋と呼ばれる国々の言語と異なり、主語という存在が希薄である。本論文では、日本語の主語は存在しないのではなく、希薄であるという立場を取ることにする。日本語では、何らかの理由で主語の希薄化が計られていると考えられる。主語の希薄化は、日本人の意識の在り方と密接な関係を持つと思われる。つまり主語の希薄性は、自我の希薄性に起因すると考えられる。ここでは日本人の意識の在り方の特徴と、日本語との関係について呼称を中心に考察する。

まず、日本人の自我の希薄性について、ユング心理学の立場から言及した河合の論を引くことにする。河合は、西洋人の意識と日本人の意識との比較を行い、次の様に図示する。(河合 1976)



ここで言う自我とは、河合のことばを借りれば、自と他とを区別するものであり、文化や社会の影響を受けながら形成されていくものである。自己とは個人の意識的な自我の在り方を保障する働きをするものである。ユングによれば、自己とはわれわれが個性と呼ぶものである。自我と自己の相違について理解を助けるために、もう少しユングのことばを引くことにする。「自我は単に意識の主体である

にすぎないのに対して、自己は無意識的なところ全体の主体である。この意味では自己を、その中に自我を包括する一つの（観念的な）量と呼ぶことができよう。」とユングは述べている。(Jacobi, J. 1959) 河合は、日本人の意識の中に西洋人のような明確な自我は存在せず、日本人が「無心」とか「無我」を強調する現象や、外界に自分の中心を投影して自分を捨てて絶対服従といった形をとってしまう傾向は、その自我の希薄性によると指摘する。日本人の自我の希薄性は、ある状況下では極端な絶対主義へと向かう危険性を秘めているという河合の指摘は反論の必要がない。しかしこの自我の希薄性は、日本人の自己を守る一手段ではないかと思われる。自我を希薄にすることは、他者との関係を円滑にする手段である。日本人が他人との対立を裂ける傾向にあるという指摘は、取り立てて新しいものではない。しかし日本人の自己機制、つまり自己の心的メカニズムがどのように働いているのか考察し、更に日本語の主語の希薄性について言及したものは見あたらない。この自己機制については、後で詳しく述べることにするが、その前に、確立した自我がもたらす自己の危機について考えることにする。

## 2. 引き裂かれる自己

アメリカでは、あまりに確立した自我のために、「意識と無意識の隔絶があり、意識された最高度の文化と、無意識の野蛮さとの間の緊張がある。」とユングは指摘した。(Jacobi, J. 1959) そしてその緊張は現実のものとなり、ドラッグやレイプ、暴力、殺人事件など、病んだアメリカの姿を晒している。

また、イギリス人精神科医、R. D. レインは引き裂かれる自己を臨床的な立場から明示した。(R. D. レイン 1971 1975) レインは「にせ自己」つまり自分の真の本性「内なる自己」に対して不誠実である自己の体系について述べた。つまり人は真の「内なる自己」とは異なる自己の存在を意識し、それを「にせ自己」と感じる。自己の客観的存在全体を「にせ自己」の表現とみなすとレインは指摘する。「内なる自己」は、「にせ自己」の特性を憎んでいる。それは「にせ自己」がみせかけに持っている異質なアイデンティティが常に自己への脅威として体験されるために、「内なる自己」は「にせ自己」を恐れているのである。このように、「内なる自己」と「外なる自己」は絶えず対立して引き裂かれているとレイ

ンは言う。これが、レインの言う「にせ自己」の考え方である。引き裂かれる自己は、しかし、個人の意識の内では自然発生的に存在するのではない。個人の意識と無意識との対立は、自己と他者との関係によって引き起こされる。つまり「にせ自己」は他者への同化によって生まれる。他者はある時には母であったり、父であったりする。「にせ自己」は、父や母の意図や期待への屈従によって生まれるのである。自分がこうありたいと思う者である代わりに、他者の定義に従って行動するものが「にせ自己」である。精神分裂病者が陥っている状況は、存在における根本的分裂がその外面的な盲従と、こういう盲従への内面的な制止との間の裂け目に沿って存在している状況であるとレインは言う。(R. D. レイン 1971) しかしこれは単に精神分裂病患者の問題ではなく、明確な自我を意識している人々が痛切に感じる問題である。レインの言う「にせ自己」をユングの言う自我を含めた意識、「内なる自己」を自己を含めた無意識ということばで置き換えてみると、この問題はユングが指摘した意識と無意識との隔絶から生まれる緊張と同質のものであることが分かる。

またフランス人の精神分析家のジャック・ラカンは、自己と他者との隔絶を次のような図で示した。(Lacan, J. 1977)



Sはある自己(主体)を示し、Sは引き裂かれた自己(主体)を、更にOはある他人を示している。また◇は自己が他者を前にした際に心の中に生じる心理状態の総体を表している。この式の意味するところは、「人間は他人を前にしたとき欲求する自己として存在し、その主体の持つ欲求が他人との間に菱形の錐穴をあける。自己の欲求は実現不可能であり、その自己は引き裂かれている。」ということである。上記ラカンの図は、幼児の自我の発達段階の一時期である、前鏡像段階を示したものであると考えられる。ここでSで示された自己は、エロスの自己と呼ぶこともできるものである。母との親密なエロスの関係の中に置かれた子の自我であると言えるものである。そこに参与する父親は、母親との独占的關係を妨害するもう一つの自我である。ここで示されているのは、二つの自我の対立である。このラカンの考えについて後に詳しく述べるが、ユング、レイン、ラカ

ンの取り上げた問題が、同様に自我に関するものであったということは大いに興味を引く。この様に、我々が西洋と呼ぶ国々の人達がいかに自我の問題を深く考えていたか、彼らにとって自我の問題がどれ程大きなものであるかが分かるのである。

### 3. 自己と他者との対立

自我を強く意識している主体と他者の対立は、ことば、ロゴスの獲得に大きく関与しているとラカン是指摘する。つまり子と母と父との三角関係は、幼児の自我・幼児の自我を無条件に受け入れてくれるもの・幼児の自我を統率するものの三つに分けて考えることができる。幼児の自我を統率するものは、ロゴス、ことば、秩序、文化、社会である。人間は、エロスの自我からロゴスの秩序・統率とに縛られる自我へと移行し、やがてそこから自由になる存在としてのことばをもつ自我として捉えられるようになる。その最後の自我を形成する役割を担うのが父親である。父親の介入によって、子は自我を発達させ、自己と他者との相違を明確に意識するようになる。ここでは、ことばにおける自己と他者との関係を見ることにする。例えば英語を例にとって考えると、鈴木孝夫も指摘しているが 'I' と 'you' は対立関係にある。(鈴木 1973) それは他者 'you' が一つの自我として自分自身の外部に存し、'I' と 'you' は互いに融和しない関係にあるという意味の対立関係である。頭の中で目の前の他人のことを考えている時には、例えば "What is he thinking about?" と三人称を用いるが、口に出すと "What are you thinking about?" のように同一人物を二人称で表すと鈴木孝夫は指摘している。明確に対象として意識される他者は 'you' と表現されるのである。この目の前の他者は、何を考えているのか知りたいという欲求の対象 'you' となり、自己 'I' がこの欲求を満たそうとした途端に、目の前の他人 'you' と、欲求する自己 'I' とは対立関係に陥る。英語に表れた自己と他者との在り方は、多くの場合こういった対立関係をなしているのが普通である。しかし極僅かではあるが、これと対照的な例が鈴木によって指摘されている。(鈴木 1982) 看護婦は患者に向かって "How are you?" とは言わずに、"How are we?" と言うそうである。'we' の意味するところは "I am against you." ではなくて "I am with you."

である。これは明らかに患者との対立を避けた表現である。この例は英語では基本的に、'you' と称される対象と 'I' とが対立していることを反証的に明示している。

ラカンの示した式をここで次のように書き換えて 'I' と 'you' の関係を図示してみることにする。

### I ◇ YOU

ラカンの示した 'S◇O' の 'S' は 'I' に、'o' は 'you' にそれぞれ置き換えることができる。I と YOU は対立し、確立した自己は、しばしば引き裂かれ、次の様な状況になる。

### X ◇ YOU

引き裂かれた自己は、ことばの観点から見れば英語の代名詞 'I' と 'you' の対立した関係の中に現れているのである。

#### 4. 引き裂かれることの少ない日本人の自己

自我が希薄な日本人の場合、他人を前にした自己は、自我が確立した西欧人の自己のようにたやすく引き裂かれることはない。それは日本語の「わたし」と「あなた」との関係を見れば理解できる。「わたし」と「あなた」は多くの場合、対立関係にないからである。目の前にいる他人が何を考えているのか知りたい時日本語では「何を考えているんですか。」とか「何をお考えですか。」と尋ねる。ここには「あなた」という二人称代名詞は現れてこない。又「わたし」ということばも、省かれることの方が多くことは改めてここで述べる必要もない。日本人は敢えて「わたし」、「あなた」という呼称を用いずに話している。そこには、西欧のように自己と他者との明確な分離・独立・対立は見られない。そこでラカンの示した式を利用して、日本人の自己の在り方を示すことにする。

### S ◇ O

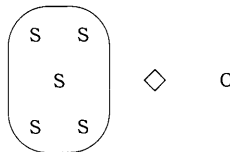
日本人の自己の在り方

ここで式が点線で示されているのは、自己と他者が日本人の意識の中では明確には区別されていないことを示している。「わたし」と「あなた」は未分化で、一個の個として独立していないので両者が対立することは少なく、むしろ「あなた」と「わたし」は「私達」として意識されることが多い。日本人が英語を書くと、'you' と書くべきところによく 'we' を用いることからみてもこの指摘は正しいと言えるであろう。「わたし」と「あなた」の関係は、対立関係を意識しない日本人の自己の在り方を明確に示している。

## 5 総体としての自己と呼称

日本人の自己は引き裂かれることが少ないと先に述べたが、日本人の自己が引き裂かれにくいもう一つの理由として、日本人の自己の拡散をあげることができる。ここでは日本語の自称詞の問題を取り上げて日本人の自己の拡散を考察する。

鈴木がすでに指摘していることだが、例えばAという人が小学校の教師だとする。Aは生徒を前にすると「みんな、先生の言うことが分かりますか。」と自分自身を「先生」と呼ぶ、「わたし」とは呼ばない。このA先生も、同僚と話す場合は自分を「先生」とは呼ばずに「わたし」と言う。Aがまた母親である場合は、子供に対して「お母さん」と自分を呼ぶ。英語ではこの何れの場合も自称は 'I' である。このように、日本語では、自己が英語のように 'I' というほとんど唯一のことばで表現されるのではなく、与えられた場によっていろいろに変容する。日本人の場合、一個の独立した主体があるのではなくて、拡散した自己の総体として自己が存在する。その日本人の自己の在り方を、再びラカン<sup>1)</sup>の式を参考に図示してみる。ここで小文字のsは、自称詞で示されるある自己の各部分、部分を指す。



拡散する日本人の自己

その拡散した部分、部分が集まって、総体としての自己を保持している。自己と他者の対立は、自己と他者が実存する限り皆無であるはずはなく、ただそれが顕著であるか否かの相対的な問題である。しかしその対立を際立たせる関係を保つか、対立を目立たせないものにするかは、その文化の特質に依る。そして他者との対立によって自己が引き裂かれることを回避しようと志向することもまたその文化の選択にまかされる。日本人の自己はいわば液体や気体にたとえることができる。拡散した各々の自己の一部である分子が、総体としての自己の中を自由に移動することができる柔軟な存在である。一方、確立した個は固体である。分子は移動する自由を奪われているために堅く、弾力性に欠き、容易に引き裂かれるのである。前述のレインは、他者への盲従は「一部分は自己の真の可能性への背信であるが、それはまた、自己の真の可能性を隠蔽し保存する方法でもある。」と指摘している。(R. D. レイン 1971) この方法をうまく採用できれば他者との対立を回避することは可能であるし、またそれは自己の可能性の温存であると言い換えることもできる。日本文化は、他人との対立関係を回避するこの方法を生かすことのできた文化である。

## 6. 役割と自称詞

自我の問題は、単に心理学の問題のみならず、社会学的にも研究の対象となっている。グロスやモリスは、社会における、人に課せられた役割と、自我との関係について取り上げた。ここでは社会学の立場から自称の問題を少し考察する。自我は他人との係わりの中で形成されることはすでに述べた。人はある地位にいたとき、他人から期待を持たれることになる。これを「役割期待」(role expectation)と呼ぶ。この「役割期待」と本来の自分との間に開きがある時、この「役割期待」を受け入れられずに、人は「役割期待」と自我との矛盾に苦しむことになる。これを person role conflict と呼ぶ。この苦しみから逃れるために、人はいろいろな解消法を取るようになる。例えばそれは、「役割期待の再規定」であったり「役割修正」であったり「役割回避」や「役割拒否」であったりする。日本人はその解消法としてまず自我を希薄にする方法をとった。そしてもうひとつの方法が、船津の言う呼称に現れている「役割コンパートメント化」であ



る。(船津 1983)「役割コンパートメント化」とはある場面ではある「役割期待」だけに応え、他の場面では他の「役割期待」だけに応えることを意味する。日本語では、「わたし」という代名詞をいつも用いるのではなく、自称詞は与えられた場面によって様々に変容することは既に述べた。母親であることが期待される、子供との場面では、「わたし」であることを捨て、「おかあさん」になるために自分自身を「おかあさん」と呼ぶ。これは自称詞に現れた「役割コンパートメント化」である。

## 7. 家族名称と役割

さらにこの自称詞の問題を、役割との関係の中で把握すると二つの興味あることが分かる。役割と自称詞の関係をもうすこし詳しく調べることにする。役割には、大別すると、社会的役割と家庭内役割がある。社会的役割とは職業や役職名を意味する。家庭内役割とは、父母、叔父、叔母等の親族名をいう。「役割コンパートメント化」が起こるのは、家庭内役割の場合が大半である。社会的役割を示すことばは他称詞として用いられるが、自称詞としては用いられない。つまり、八百屋さん、おまわりさんや会社の課長などは他称詞として用いられるが、自らを職業や地位名で呼ぶことはない。自称詞のコンパートメント化は「おばさん」「おかあさん」「にいさん」「おじさん」などの家庭内役割を表すことばに現れる。さらにこれらの親族名は、こどもが呼ぶ他称詞をそのまま用いたものであることが分かる。このように、日本語の自称詞は、家族名称と、大人と子供の関係が大きく影響していることが分かる。

## 8. 文化的背景としての母性原理と父性原理

親子の関係が、日本文化の背景において大きな位置を占めていることは明らかである。日本では、母と子との関係が文化的基盤を形成していることが、阿闍世コンプレックスとして古沢平作によって初めて指摘されたのは1936年であった。当時、父と息子の関係に焦点を当てたエディプス・コンプレックスを基にしたフロイトの学説が主流であったために、この古沢の説はほとんど評価されずに終わっている。しかし、現在母子関係とそこに表れる母性原理が重要な文化基盤である

ということは河合隼雄らによって指摘され、もはやその重要性は無視できない。ここで母性原理と呼ぶものは、フロイト及び、ラカンがエディプス前期と呼んだ母と子の融合状態を維持しようとする意図及び意志を示す。フロイトの説を踏襲し、さらにこれを発展させたラカンは、パラノイアを分析し、母と子、父と子、及び兄弟との関係が自我の確立に大いに関与していることを発見した。(ラカン 1986) 母性原理ということばを誤解されないためにここでラカンの説を引いて母性原理について説明する。先に述べたように、自我確立の最初の段階として、母親との融合関係が存在する。この段階において、自己と他者は明確に区別されてはいない。母と子は精神的に合体している。この融合関係を侵す存在が父親である。父親の介入が、母との融合関係に亀裂を生じさせるため、子は激しく動揺する。父は他者として登場し、子の自我と他者を区別する機能を果たす。ここで父を精神的に殺すみちをとるのがフロイトの言うエディプス・コンプレックスである。しかし、日本の場合、父は殺されなければならない程大きな力を持ち得ない。日本では、父親の出現後も、母と子の融合関係は継続し、阿闍世コンプレックスとして文化の一つの層を形成する。父性原理は先に述べたように、母子の融合関係を切り離し、子の自我と他者を区別する機能を言う。佐々木孝治はその著、『母親・父親・掟 [精神分析による理解]』の中で人の幼児期(エディプス期)における父親の機能について次のように述べている。

ところで、ここでもういちど立ち止まり、一般にエディプス期の特徴として説明されるところを一瞥してみたい。

そこでは、まず始めに、幼児の母親に対する初期の同一化にひびのはいることがあげられる。そして次に、この亀裂を生じさせた当の張本人である父親に対して、幼児は激しい動揺をとめないながら、やがて第二の同一化をなしとげていく。

ここで同一化と表現されているのは、フロイトが用いた identification の訳語であり (Freud, S. 1959), また社会学者, T. パーソンズが子供の社会化の一過程として挙げたことばである。(T. パーソンズ 1981) パーソンズはフロイトの説を基に、父親の社会学的機能について研究した。父親との同一化の過程におい

て、子供は母親との融合関係から切り離されて社会化の道を歩んでゆく。この父親の機能について更に佐々木の指摘に耳を傾けてみよう。

このようなエディプス期の心理的過程で大きな意味を持っているのは、男根（ファルス）の作用である。

もちろんこの場合に、男根とは高度に抽象化された言葉で、父親が所有しているもの、という意味であって陰茎（ペニス）のような、解剖的な器官を表す言葉と混同すると大いに理解が妨げられる。母親に対する初期の同一化とは、前にみたように幼児における母親との想像的な融合状態であった。この状態では、幼児は心理的には、母親と無差別に合体しているのでみずからがそのまま母親の不足分を満たしている。そして母親の不足分とは、まさしくここでいう男根であり、幼児はこの状態では自分がそのまま男根であるような世界に生きていたのである。

ところが、初期の同一化に亀裂を生じさせる機能は、幼児を自分が男根である状態から引きずりおろしてしまう。つまり母親の不足分を満たす存在が自分のそとに現れることになり、この存在は幼児にとってはじめて外部に現れた最初の記号表現となるべきものである。そして幼児はこのような男根をそなえた存在、すなわち父親に対して、第二の同一化をなしとげていく。しかもこの父親は、象徴であるかぎり、次から次へとその記号表現を置き換えながら、この同一化の過程を通して、幼児に永続的な機能を及ぼしていくのである。

象徴としての父親は、子供に記号の存在を示す。そしてそれは子供の社会化の過程において絶えず続けられていく。母との充足された関係はここにはなく、象徴としての父親の出現によって近親相姦を禁止する掟、つまりことばが子供に課せられることになる。父親が十分に機能している社会では、母と子は父親によって緊密な関係を断たれ、その時点から子供にとって父親がそうであるように母親もまた外部の存在として存在するようになる。このとき社会的にあくまでも守らなければならない掟が母と子の間に立ちはだかる。子は母の一部ではなく、一個の己として存在するようになる。これが社会化の進んでいった結果である。フロイトはこの過程を次のように述べている（Freud, S. 1959）

A little boy will exhibit a special interest in his father; he would like to grow like him and be like him, and take place everywhere. We may say simply that he takes his father as his ideal…… The little boy notices that his father stands in his way with his mother. His identification with his father then takes on a hostile colouring and becomes identical well.

ところが、父親の機能が弱いと、母と子はいつまでも一体感に浸っており、父親もまた隔絶、孤立を避けて母親と一体になろうとする。子にとって同一化の対象であるべき父親は母親同様融合状態の中において、自己は一個の己としては存在し難いのである。これが日本人の自我の希薄化の一要因であり、母性原理が日本人の自己の在り方を規定している理由と言えるであろう。

## 第二章 日本文化の底流にみる母性原理

### 1. 呼称に表れた母性原理

日本では、母性原理——母と子の融合関係を維持しようという集団の意志——が文化の底流にあるということは、既に述べた。ことばにはその文化的特徴が、様々な形態をとって表出する。日本語の呼称には、日本文化の根底に存在する母性原理が明確な形で表れている。ここでは、母性原理が日本語の呼称にどのように表れているかを考察する。

呼称に関する研究は、鈴木によって成された一連のものがある。それらは、まことに示唆に富むものである。また、鈴木の研究を基礎にした、F. C. パンの研究も一考に値するものである。しかし、鈴木もパンも日本語の呼称に表れた文化的特徴、つまり母性原理の存在に言及するまでに至っていない。つまり、ユングやフロイトやラカンを中心とする心理学の立場から日本文化を考察するということは成されなかった。また、鈴木、パンの研究が発表されてからすでに20年以上もの歳月が経過している。そこで、ここでは鈴木とF. C. パンによる研究を参考にしながら、文化的背景——つまり母性原理に焦点をあてながら日本語の呼称を

再考察する。

日本語の自称詞において「役割コンパートメント化」が起こる時、そこにはある特徴をみてとることができる。例えば、母親が子供と話す時には、自分を「おかあさん」と呼ぶし、父親は自分を「おとうさん」と呼ぶ。また、父や母の兄は、自分を「おじさん」と呼ぶ。鈴木はこの現象を「子供中心主義」と呼ぶ。(鈴木 1968) この指摘は妥当であると思われる。しかし、ここで更に付け加える必要があることは、この構造は最年少者がある程度の年齢になった時には、変化することもあるということである。例えば、「おばさん」と自称している父・母の姉妹は、いつしか「おばさん」という自称詞を捨てて「わたし」と呼び始めることもある。しかし、最年少者が幼児である間は少なくともこの構造は維持されている。言い換えれば、大人と幼児の会話に見られる呼称に関する現象が、日本語の呼称体系の基本になっていると思われる。これは、明らかにフロイトやラカンが指摘した前エディプス期の母子関係と無関係ではない。そして、母子関係を基礎とした融合関係は、最年少者が幼児である限りその形態は消滅せずに維持される。最年少者がある年代になると、この体系はその結束性を弱めていくが、幼児の間は結束性は強い。

大人が子供の立場から話すという現象は、自称詞に限らない。他称詞についても同じことが言える。父や母はお互いを、子供の立場に立って「おとうさん」「おかあさん」や「ママ」「パパ」などと呼ぶ。またこういった現象は家族内にだけみられることではない。見知らぬ子に呼び掛ける時、大人は子供に対して「ぼく」を用いる。教師や医者、生徒あるいは患者である子供の立場から、その両親を「おかあさん」「おとうさん」と呼ぶ。こういった現象も子供が幼児である場合に確認できることであって、ある程度年齢が高くなった子供に対して起こるとは限らない。ここでも視点の中心は、子供(幼児)である。大人は子供の視点を共有することで、子供との融合関係を保っている。この子供と大人の融合関係は、先に考察したような、母と子の同一化の現象と無関係ではない。母と子の融合関係、もしくは、それに準じた融合関係、つまり他人との融合関係を維持しようとする集団の意志、つまり母性原理が、この大人と子供(幼児)を含んだ会話における呼称に明確に現れていると言えるであろう。さらに子供の視点を共有す

ることで、親族外の者も一時的に親族内の位置を占め、ある融合関係を形成することができる。つまり、日本語の呼称体系の一面を形づくっているのは、母性原理を基礎とした親族名称である。

日本語の呼称に現れた母性原理の存在を明らかにするために図1を参照する。図1はパンによって、鈴木による呼称の研究をさらに進めたものであり、末の子供の視点から、親が他の子供を呼称する構造を示す。(F. C. パン 1982)

子供が複数いる場合、親は長男や長女に向かって、「おにいちゃん」「おねえちゃん」というふうと呼ぶ。この場合、親の視点は末っ子の視点と重なって、親は末っ子と同一化している。

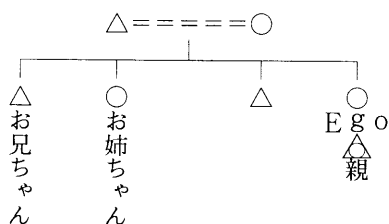


図1 親がEgo (末子) の立場で長男・長女を親族名称で呼称する図解

このパンの指摘は日本文化の底流にある、母性原理を明らかにする上で、有意義な見解である。つまり、末っ子は親にとって最も身近な存在である。つまり融合関係を保ちやすい存在なのである。ここでも母と子の融合関係を基礎にした、母性原理の存在は明らかな形であらわれている。F. C. パンは更に、この分析方法を用いて英語における親族名称を図2のように図示してみせる。(一部掲載)

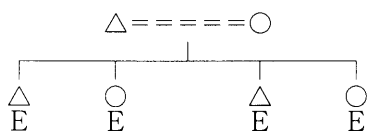


図2

注：Eはegoを示す  
(Eは本論文の筆者が付加)

日本語の親族名称と異なる点は、どの子供の立場から呼称しても、相違はなく、またどの子供も同じように first name で呼ばれるということである。日本語のように末っ子が特別の存在になるということはない。これをパンは「日本語の場合を点型と考えると、アメリカの場合は、線型になる」と指摘している。日本語の点型構造は、様々な形態をとって呼称に現れる。パンの指摘にもあるように、一人息子の場合にも「でっちあげの末っ子」が現れる。

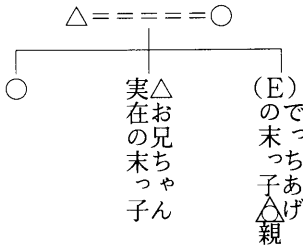


図3 一人息子に親が親族名称で呼称する図解

パンの指摘を基礎に、論をさらに進めると、「でっちあげの末っ子」の存在は、ふたつのことを意味していることが分かる。ひとつ目は、一人息子を「お兄ちゃん」と呼ぶのは、家父長制において、この息子が継承者であるという宣言であり、刻印である。ふたつ目は、親と子供の同一化がイメージとして存在しているということであり、現実に存在しなくても、親と子の同一化は社会的原理として機能しているということである。そしてこの社会的原理が、母性原理であるということとは明らかである。

さらに、パンが指摘したこの「でっちあげの末っ子」を用いて論を進めると、興味あることが分かる。パンはこの「でっちあげの末っ子」の概念を親族内の呼称に限って用いているが、親族外の呼称にもあてはめることができる。

例えば、中年の婦人に向かって「おかあさん」、中年の男性に対して「おとうさん」、若い婦人に「おねえさん」、若い男性に「おにいさん」と呼び掛けるのをよく耳にする。勿論、呼び掛けている人は、呼び掛けられている人と血縁関係がないばかりか、初対面のことが多い。この興味ある現象を「でっちあげの末っ子」を用いて図解すれば、図4のようになる。図4では、呼び掛ける者をA、呼び掛けられる者をBとする。また、でっちあげの末っ子はDとする。親族外のAもま

たこの呼称体系の中では、親族の一員であるかのような位置を占めることができる。親族内の一員として組み込まれることで生まれる効果は、AとBの間に醸しだされる融合関係であり、その場に居合わせる人々との融和感である。このように日本語の呼称には、母と子の融合関係を基礎とした母性原理が大きく関与していることがわかるのである。

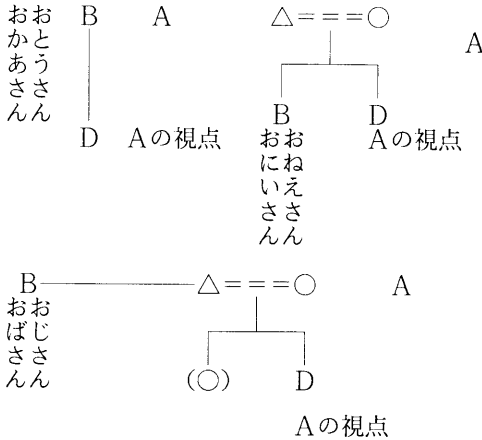


図4 親族外に現れた「でっちあげの末っ子」

こういった行為は、親が子供の挙動を模倣するという実際の行為に似たものがある。つまり年下の視点に立つと言う意味で共通である。この両親の幼児行為の模倣についてスピッツは、この行為は、こどもの人間性の獲得に大きく関与していると指摘している。(Rene A. スピッツ 1968)

スピッツによれば、両親は遠い昔の幼児期の記憶をもっていないので、模倣するためには近づき難い領域を乗り越えて一時的退行を敢えてすることになる。そしてこの両親の同一視過程によって、子供のごく原始的な同一視を喚起する。こういった対象関係がないと、こどもの発達は妨げられる。

スピッツが研究対象としているのは、ごく低年齢の幼児であり、母との関係が幼児に及ぼす影響である。しかし、母と子の関係において見られる行為が日本語の呼称にみられるということは興味深いことである。こういった行為が呼称のなかに組み込まれることによって、その行為はほとんど無意識的に行われ、さらに



この呼称体系は、こどもがかなりの年齢に達している場合でも使用を許される。これは、こういった母子関係を基盤にした対象関係を日本人が志向した結果である。日本人は対立関係を避けてこの母性原理を選択した。そしてこの行為をほとんど無意識的に行えるような方法を選んだという意志が感じられる。こどもとの同一視のもつ機能についてももうすこし考察をすすめる。スピッツはこの同一視の機能としてジョークの含みをもつことを挙げている。成人にとってこの行為が、幼児的内容への罪のない退行であり、無意識的緊張からの開放をもたらすと指摘する。中年の婦人に「おばさん」と呼び掛ける時、我々の心に何か緊張の緩和が感じられるのはこういった心の働きがあるからである。日本語の呼称を検証することで、幼児の時期に母子が築いていた対立のない融合関係を維持し、緊張関係を回避する日本人の姿が浮かびあがってくるのである。

## 終わりに

母性原理による社会の形成にはある種の不合理が見受けられる。それは、他者との融合関係を保とうとする意志が働くために、個々の個性や自我の確立が阻害されるということである。この良し悪しを一面的に語ることはできない。その長所が他人との対立を回避することであり、又それは自我を守るすぐれた手段であるということはすでに述べた。母性原理の優れた特徴だけを述べるのでは片手落ちである。母性原理のもたらす不合理性に言及し、さらにその不合理性をどのように補っているのかを呼称を含めた待遇表現に焦点をあてて論じることにもまた必要である。日本人の自我が希薄であるということが、英語や仏語などに比べて日本語の主語が明確に現れてこないことに関係があり、主語の不明確さが文脈の不明確さの原因となることは事実である。この不明確さを待遇表現が補っていることは多くの人が指摘している。にもかかわらず心理的側面からの考察はなされていない。待遇表現が融合関係を解体し、個の存在を主張する一手段であるということをも更に詳細に指摘する必要がある。しかしこの待遇表現が担っているその機能父性原理について言及するのは次回の機会に譲ることにする。

## 参 考 文 献

- 河合隼雄：『母性社会日本の病理』 中央公論社 1976
- Jacobi, J. : Complex Archetype Symbol in the Psychology of C. G. Jung, Bollingen series LV I I Princeton Univ. Press 1959
- R. D. レイン：『引き裂かれた自己』 みすず書房 1971
- ：『自己と他者』 みすず書房 1975
- Lacan, J. : 『エクリⅡ』 弘文堂 1977
- ：『エクリⅢ』 弘文堂 1981
- ：Ecrits, Tavistock publications, 1977
- ：『家族複合』 哲学書房 1986
- 佐々木孝治：『母親・父親・掟 [精神分析による理解]』 せりか書房 1979
- 鈴木孝夫：『ことばと文化』 岩波書店 1973
- ：「ことばと社会」『岩波講座 哲学 11巻 言語』 岩波書店 1968
- ：『言語からみた対立と同化の構造』 「ことばと文化」 日本文化会議編 研究社 1975
- ：『自称詞と対称論の比較』 「日英語比較講座 第5巻 文化と社会」 大修館書店 1982
- 船津衛：『自我の社会理論』 恒星社更正閣 1983
- 古沢平作：『罪悪意識の二種—阿闍世コンプレックス』 良陵 東北帝大医学部 1936
- T. パーソンズ：「家族」 黎明書房 1981
- Freud, S. : Group Psychology and the Analysis of the Ego, W. W. Norton & Company 1959, translated and edited by James Strachey
- F. C. パン：「呼称の社会学—日米の比較」『日英語比較講座 第5巻 文化と社会』 大修館書店 1982
- Rene A. スピッツ：『ノー・アンド・イエス — 母—子通じ合いの発生—』 同文書院 1968
- 以上引用順—
- A. ルメール：『ジャック・ラカン入門』 誠信書房 1983
- 第三部 象徴体系の獲得による主体確立と分裂 — この移行におけるエディプス期の役割—